

本を写すことと切ること

〔講演要旨〕

田 中 登

今年2005年は、古今和歌集ができてから1100年、新古今和歌集ができてから800年という、文学史上まことに大きな節目の年にあたっております。そのため、全国各地で、古今集や新古今集にちなんだ展示会が色々と催されていますが、わが関西大学総合図書館でも、秋の特別展を「八代集の世界—古今・新古今を中心に—」と題して行うことになりました。現在、関西大学図書館が所蔵している写本や古筆切が二十数点展示されているわけですが、今日は、この展示にちなんだ、写本や古筆切について、お話してみたいと思います。

二

明治以前、江戸時代までの本を和本といいます。これには、印刷された版本と人が手で書き写した写本とがあります。古今集や伊勢物語、あるいは源氏物語など、いわゆる文学作品が、印刷された版本で読まれるようになったのは、江戸時代になってからのことです。それまでは、文学作品はもっぱら写本という形で読まれていました。

写本というのは、一般にお手本を元として、それを忠実に写していくわけですが、ただ、平安時代の人々は、ただ単に元の本を正確に書き写すというだけでは満足せず、一巻の書物、一冊の本の中に、優雅なみやびの世界を具現すべく、美しい料紙に美しい文字で書くことに腐心したのでした。そのため、美術的にもきわめて価値の高い写本が数多く作られたのですが、室町の後半から江戸期にかけて、茶道の隆盛とともに、古人の筆跡を鑑賞する風が起きると、不幸にもそうした本は、一枚一枚の紙片に分割されることになったのです。こうして生まれたのが、古筆切すなわち古写本の断簡なのです。

この古筆切というのは、世間に出回る時には、当時、古筆見（こひつみ）といわれていた、いわば古



講演中の田中先生

筆鑑定家の鑑定書が付けられるのが普通でした。鑑定書といっても、縦が十数センチ、横が二センチほどの小さな紙切で、ここに切の筆者の名を書くわけですが、これを極札（きわめふだ）といいます。今でも、極付きの演技とか、極付きのファイン・プレーなどという時の極（きわめ）とは、このことなんです。

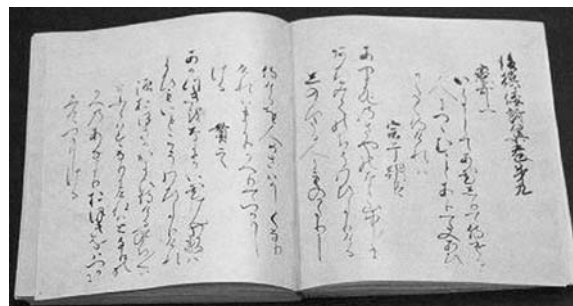
また、こんな小さな札では頼りないという場合は、もっと大きな紙を用意して、それを横に二ツ折りにし、そこに麗々しく鑑定結果を書いたりすることもありました。こちらの方は、折って使うことから、折紙（おりがみ）などと呼ばれていますが、現在、折紙付きの～など、人や物を褒めたりする時に使う言葉は、ここに端を発しているのです。

三

江戸時代には、お公家さんはもちろんのこと、武家や裕福な町人に至るまで、人々は争って古筆切の収集に憂き身をやつすといった有り様でした。当時の人は、こうして集めた古筆切を掛軸に仕立てたり、屏風に貼ったり、あるいは、手鑑といって、現在の写真アルバムのようなものにベタベタと貼って、鑑

賞していたりしてたのです。

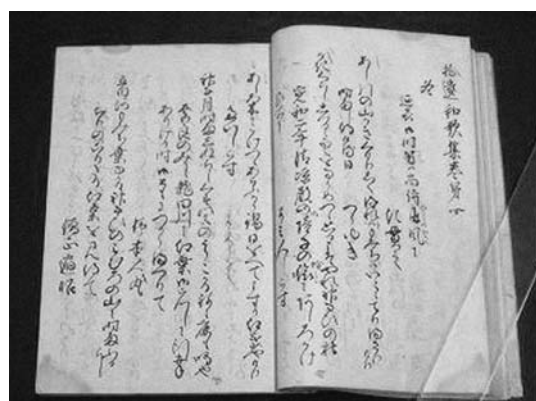
今回の展示品でいえば、顕広切や中山切などが、それに該当します。顕広切は藤原俊成が四十代のころに書写した古今集の断簡で、切名は俊成がまだ顕広と名乗っていた頃に書写されたことにちなむものです。したがって、これは平安時代の書写ということになります。



後撰集



中山切「古今集」
(16.3×15.7cm)



拾遺集

中山切は、公卿の中山家に伝来したことによるものといわれていますが、草花などの下絵を施した上に、金銀の箔や砂子を散らしたきわめて豪華な料紙に、古今集を書写したもので、書写年代自体は鎌倉まで下がるようですが、いかにも王朝貴族好みの装飾本といった仕上がりになっています。

また筑後切は、もと藍色の雲形文様を上下に漉き込んだ卷子本に、後撰集を書写したもので、歴代屈指の能書家として知られる伏見院の手になるものです。一首の歌をゆったりと三行に書写しているところに、いかにも帝王振りの作品という感じがいたします。

なるものですが、上冊は、いわゆる異本系統のもので、朱筆で至るところに定家本との校合注記が見られ、数少ない拾遺集の異本系統のテキストとして、今後の研究がまたれるものといえましょう。

新古今集はわずかに巻16から20の5巻分を伝える零本にすぎませんが、古筆の世界では昔から「北山切」の名で親しまれているものです。この北山切の筆者を江戸時代の鑑定家は足利尊氏と鑑定しており、今までほとんど信用されてこなかったのですが、この本には巻末に奥書があって、そこには貞和6

四

写本の方で注目すべきは、日野本八代集の中の後撰集です。これは、学界では「承保本」の名で知られたもので、承保3(1076)年という本奥書をもって、これが平安時代に行われていたテキストの流れを汲むものであることが分かるのです。実際、本文を子細にみてゆくと、通常流布の定家本とは確かに色々な点で相違が大きく、後撰和歌集の研究上、きわめて注目すべきものといえましょう。

また、二冊からなる拾遺集は、江戸時代の書写に



北山切「新古今集」
(左右各々22.2×14.8cm)

(1350)年に書写したとあります。この貞和6年というのは、足利尊氏の生存中のことであって、しかも書風は足利尊氏のそれと類似しているのです。今後、尊氏の真筆の可能性をもっと真剣に考えてみる必要があります。

五

「八代集の世界」と題する今回の展示では、王朝400年の和歌の歴史を、古今集から新古今集に至る8つの勅撰集の写本や古筆切によって、ほぼ概観できるようにしてみました。展示品の書写年代も、平安・鎌倉・南北朝・室町・江戸と、様々な時代のものを選び出し、時代による書風の変遷をも、ある程度たどれるように心掛けてみたつもりです。

これらの展示品を通じて、日本文化の形成に大きな影響を与えたといわれている古今集を始めとする



写本の説明をされている田中先生

王朝和歌の世界に思いを馳せてみていただければ、幸いです。

(たなか のぼる 図書館長・文学部教授)

この講演は、平成17年度秋季特別展「八代集の世界—古今・新古今を中心に—」にちなみ記念講演として、平成17年11月29日(火) 図書館ホールにおいて開催したものである。
